熊本大学学術リポジトリ

居酒屋 ： 新体詩 ： 文苑

著者	花柴
雑誌名	龍南會雑誌
巻	１２４
ページ	４６-４７
発行年	1908-03-13
URL	http://hdl.handle.net/2298/6091

ふ春の世の遠き遠きかすかな妙音に静まる蛇足堂の春の朧はかくして更くる。

（四十一年二月十六日）

苦悶

江中紫秋

大輪の眞黑き華のはためきに
音なく揺ぐ蕭やかの夜の一室は
心臓の吐息の熱に蒸しぐるし。

たもひで銘す象の牙を固く嵌めたる
黑鐵の檣、苦悶の帆を揭げて
胸の巨波かけりきぬ、我が眼の前を。

その舟の青き魔王は手を把りて
舟にかき乘す。―我をしも黑曜石の
板の上の屠肉の身にと。―見あぐれは
天鵞絨色の帆の裏に火の巨檣
照りすきて非命の風に帆ぞ喚ぐ。

一室の夜の黑き華、その花瓣は
たもむろに我身を包み、その蘂は
夢の香を我が胸にしみらに注ぐ。
かゝる時、大船消るぬ。帆も消るぬ。
我も眠りぬ。瞬間に霧はかゝりて。

居酒屋

花柴

大晦日暮れなむとしていまだ暮れぬに
深山颪の雲吹きたろせは
音に立てゝ吹雪ぞしきる――
居酒屋はまだ灯ともさず。

『御免んなッせる』―大男

ぼたぼたとまじく飛び込みぬ
薄やみに眼ひかれり。
鼠は隅より梁に傳いぬ。

新酒の香、いとも高きに
桝あふみ〳〵と盛りて渡せは
ほくそ笑み、息をもつかで
桝の角より飲み乾〳〵ぬ！暫時の間。

居酒屋出ては、いま大男
千鳥足、端唄をか〳〵う
道も狹げなる歩態！
後閉きし板戸に雪はいよ〳〵つのる

蹄鐵工場

冬の日は鈍色の
鉛と融けし雪に消されて
乾破れたる荒土壁の

軒に吊せる干し大根に
塞げの光も浴せかけず。

馬喰連、三四人
鞭を圍み濁み聲に
興じては火花の散るも
知らず顔。！鍛ひつゝ
をり〳〵は笑む蹄鐵匠

腐れ藁、此處かしこ
散らばら庭の樣につゝぐ
駒二頭！蘆毛と栗毛！
音立てゝ吹く深山嵐に
立鬣を逆立てさせて。

何にかも、ふためきも
鶺鴒、音も鳴かず
飛び込みてかゝるこそと